

年	月 日	事 項	掲載書目
	十二月十七日	某大學教授ノ説トシテ、中學ニ於ケル漢文科不可廢漢字不可捨論ヲ掲グ。	日本
	十二月十八日	日本新聞、新定假名遣延期説ヲ掲グ。	
	十二月十九日	文部省ハ國語漢文科ノ名ヲ廢シテ、國語科ト改ムベシトノ議ヲ高等教育會議ニ提出ス。	
	十二月二十日	時事新報、國字ト國體トノ關係ヲ叙ベ、國字改良ノ急務ナルヲ説ク。	
	十二月二十日	フローレンツ、『新定羅馬字書方に就て』ト題シ、其實用的ノモノニアラザルヲ論ズ。	言語學雜誌一ノ十
	十二月二十日	國字改良部ニ於ケル新羅馬字書方審査委員前島密、小西信八、後藤牧太、小山初太郎、林茂淳、澤田吾一、林麿臣、平井正俊等ノ諸人合議ノ上、シハシ、チツハチ、フハフ、ダヂヅハダヂヂ、ザ行ハジズノ二音ヲ缺クコト、チヤチュ、ハヤ、tyu、tyoトスルコト、ジヤ、ジ、及ビヂヤ、ヂヤ、ハ、dyuトスルコトニ決ス。	
	十二月二十一日	須崎芳三郎(默堂)、『延期を建議せよ』高等教育會議員に勸告す』ト題シ、文部省ノ漢字限定及ビ假名遣改訂ニ於ケル專斷疎忽ヲ難ズ。	日本
	十二月	帝國教育會漢字節減調査委員ヨリ漢字節減調査會ノ決議及ビ其理由ヲ報告ス。	教育公報二四二
	十二月	樋口門之介、其發明セル新國字ヲ示シテ其組織ヲ説明ス。	

明治三十四年

一月一日	井口丑二、其平假名字ニ由レル新字ヲ掲グ、其玆ニ到レル所以、書法、及ビ實施ノ方法等ニツキテ詳論ス。	長崎新報
一月一日	東海新聞、澁谷愛(馬頭)ノ國語愛國心ニ關スル談話ヲ掲グ。	
一月一日	八杉利(勃舟)、『講談文學と現代語の修養』ト題シ、講談物ノ愛讀セラルルハ其用語ノ圓熟ナルガ故ナレバ、之ヲ救ハンニハ趣味ノ涵養ト共ニ現代語ノ修養ナカルベカラズト説ク。	新文藝一ノ一
一月一日	堀江秀雄、『國語の將來』ト題シ、言文一致ノ必要ヲ説ク。	國文學二十五號
一月十一日	帝國教育會國語改良部總會ニ於テ報告案ヲ可決シ、羅馬字五十音ノ綴方ハ文部省調査報告ト一致セシメンコトニ定ム。	
一月二十日	新村出、『羅馬字書方の改正に就て』ト題シテ之ヲ評論シ、併テ帝國教育會ノ羅馬字書方ニ及ブ。	言語學雜誌二ノ一
一月二十日	市村瓚次郎、哲學館同窓會例會席上ニ於テ、『中學教育に於ける漢文の價値』ト題シ、種々ナル方面ヨリ漢文ノ必要ヲ論ズ。	國學院雜誌七ノ一
一月二十日	三矢重松、『字音新假名遣に就いて』ト題シ、文部省ノ態度ヲ責ム。	
一月二十六日	神田青年會館ニ於テ、言文一致會第一回公開演說會ヲ開キ、岡部精一、菊池大麓、坪井正五郎、井上豐太郎、井上哲次郎等、出演ス。	
一月二十七日	福地源一郎、『小學の用字及字音綴字法』ト題シ、文部省ノ獨斷ヲ難ズ。	日出國新聞
二月一日	帝國教育會國字改良部總會ニ於テ、羅馬字書方ノ内、拗音、長母音、鼻聲音附號、及ビ語ノ分別書方等ノ調査ヲ了ス。	

年	月 日	事 項	掲載書目
	二月 二日	斯文學會ニ於テ、漢文科名廢止反對演說會ヲ開キ、内田周平、細田謙藏、谷干城、井上圓了、肝付兼行等、出演ス。	
	二月 三日	教育學術界ハ其社説ニ於テ、『漢文科ノ教育的價値』ト題シ、一般ニ課スル漢文ハ、『國語化セル漢文』ヲ以テスベシトテ文部省案ヲ贊成ス。	教育學術界ニ四
	二月 五日	久米邦武、『國字改良論』ト題シ、漢字全廢論ハ空論タルニ過ギズ。今ノ國語ニ不足ナルハ營業社會ノ交際上ノ言語中、其運動ヲ詳明スル用語ノ乏シキニアリ、國字改良ノ要點ハ此ニ存スト説ク。	太陽七ノ二
	二月 五日	井上圓了、『漢學ノ運命』ト題シ、漢學漢字ノ危急ヲ説キテ漢學家ニ警告ス。	東洋哲學八ニ
	二月 十二日	漢學者團體ヨリ漢文科存置ノ請願ヲ貴衆兩院ニ提出ス。	
	二月 十三日	東海新聞、『漢文と國文』ト題シ、國文ノ爲メニ漢文ヲ研究スベシト説ク。	
	二月 十三日	言文一致會ヨリ同會設置ノ請願書ヲ貴衆兩院ニ提出ス。	
	二月 十四日	讀賣新聞、言文一致會ノ請願書ヲ掲ク。	
	二月 十五日	ジャパン、メール、言文一致及ビ漢文科存置ノ兩請願ニツキテ批評ス。	
	二月 十七日	帝國教育會ニ於テ、言文一致會第二回公開演說會ヲ開キ、澁谷愛、前島密、加藤弘之、新渡戸稻造、白鳥庫吉、梅謙次郎等、出演ス。	
	二月 十八日	西村茂樹、日本紙上ニ於テ、『國家文運の前途』ト題シ、漢字漢學ハ全廢スベカラズト説ク。	
	二月 十九日	信濃毎日新聞、言文一致會ノ請願書ヲ批評シ、更ニ口語的ナラザルベカラ	

	二月 二十一日	池田常太郎、日本ノ漢文ハ今日ノ支那ニハ實用ナキヲ説ク。	時事新報
	二月 二十四日	漢學者、日本紙上ニ於テ國語漢文科合併反對意見書ヲ發表シ、漢文漢字ノ利益ヲ説ク。	
	二月 二十六日	葉末露子、言文一致ノ得失ヲ述ブ。	米澤新聞
	三月 一日	川田鐵彌、『言語の發達を論じて國字改良論に及ぶ』ト題シ、標準語制定ハ現今ノ急務ナル所以ヲ述べ、文部當局者ノ粗略ニシテ方針ノ動キ易キヲ歎ズ。	新文藝一ノ三
	三月 二日	山陰新聞、『國語改良の態度』ト題シ、其慎重ナラザルベカラザルヲ説ク。	
	三月 三日	神津包明、『言文一致の現在及び未來』ト題シ、言文一致ノ必要意義及ビ實行方法ニツキテ略叙ス。	教育學術界ニ四五
	三月 四日	湯淺吉郎、文字各種ノ長所ヲ擧ゲ新國字ノ發明ヲ促ス。	京都新聞
	三月 五日	神保小虎、『ローマ字變革論』ト題シ、從來ノローマ字書方ニ破壊スベキホドノ罪ナクシテ、其破壊ヨリ來ルベキ害ハ大ナリト説ク。	太陽七ノ三
	三月 九日	言文一致會ニ於テ、課題『梅見に人を誘ふ文、梅みの文』ノ文例ヲ公ニス。	
	三月 二十一日	言文一致會第四回公開演說會ヲ開キ、高田早苗、保科孝一、及ビ大隈重信出席演說ス。	
	三月 二十五日	後藤寅之助(宙外)、文章ヲシテ口語ニ接近セシムベク、又其方法トシテハ立派ナル言文一致文範ヲ出スベシト論ズ。	大阪毎日新聞
	三月 二十六日	貴衆兩院ヨリ言文一致會設置ノ建議書ヲ政府ニ送附ス。	
	三月 三十日	山田武太郎、國民新聞ニ於テ言文一致會修正ノ『梅みの文』ヲ批判シ、其缺	

年	月 日	事 項	掲載書目
	三月	點ヲ指摘ス。 高等師範常小學國語科實施方法要領ヲ發表ス。 石川倉次、『ラ』を「と」についてト題シ、を「一」ニスルハ可ナレドモ「ラ」ト讀マシムルハ不可ナリト説ク。	國民新聞
	四月十五日	社會新報、言文一致會ニ向ツテ敘事談ノ講壇ヲ開カンコトヲ勸ム。	教育公報三四六
	四月十八日	白鳥庫吉、『言文の一致を要する歴史的原因』ト題シ、其所見ヲ述ブ。	教育學術界三ノ一
	五月五日	向軍治、『言文一致の文體に就き』ト題シ、山田武太郎ノ説ヲ批評ス。	讀賣新聞
	五月六日	西村茂樹、學士會院ニ於テ『言文一致を論ず』ト題シ、世人ハ西洋崇拜ノ餘 此論ヲナスニアラザルカト演ブ。	
	五月十三日	讀賣新聞、此日ヨリ所々ノ言文一致會ニ於ケル演說筆記ヲ掲ゲ、言文一致 ノ實行ヲ促ス。	
	五月十八日	澁谷愛等ノ發起ニテ、千葉言文一致會發會式ヲ梅松別莊ニ開キ、前島密、 後藤牧太、岡部精一、三矢重松、中井喜太郎、井上豐太郎等、出演ス。	
	五月十九日	向陽ト號セル人、『言文一致と歌語』ト題シテ、現行口語ニハ七七七五ノ形 ノ適スルヲ説ク。	河北新聞
	五月二十八日	國字改良部總會ニ於テ、漢字節減調査會ノ決議及ビ其理由ノ報告ニ基キ、 漢字節減ノ標準ヲ議定ス。	
	六月四日	錦濤子、島根縣私立教育會總集會ニテ、候文體ヲ廢シテ言文一致體ヲ用キ	
	六月五日	ノ適スルヲ説ク。	

六月五日	松島剛、『羅馬字書き方に就き管見』ト題シテ、其所見ヲ述ブ。	教育時論五八一
六月十五日	江尻庸一郎、『一』につきてト題シ、其不可ヲ説ク。	教育公報二四八
六月二十五日	楊柳城、言文一致ノ大成ヲ期センニハ徒ニ空論ニノミ馳スベカラズト述ブ。	教育公報二四八
六月二十二日	某ト云フ名ニテ『言文一致と語法』ト題シ、之ガ研究ヲ發表スルモノアリ。	民聲新報
六月三十日	國字改良部ニ於テ、長音符ト草書體ノ新字、)ニ改メンコトヲ決ス。	東北新聞
七月一日	讀賣新聞、『地方官及視學官會議』ト題シ、菊池文相ハ宜シク本會議ニ於テ 言文一致ノ急務ナルヲ説キ、其實行方法ヲ諮問スベシト述ブ。	福岡日々新聞
七月七日	塚利彦(枯川)、言文一致ハ先ヅ書簡文ヨリ實行スベシト説ク。	言語學雜誌二ノ四
七月十日	藤岡勝二、『言文一致論』ト題シ、言文一致ノ意義ヲ説明シ、其利益ヲ擧ゲ 其實行法ニ就キテ説ク。	秋田日々新聞
七月十四日	好紫樓、言文一致普通文(枯川著)ノ批評ヲ掲ゲ。	教育公報二四九
七月十五日	アーネスト、エドワーズ(E. R. Edwards)、『言語改良と言文一致』ト題シ、 聲音學ノ立脚點ヨリ假名遣及ビ文字ノ改良等ニツキテ論ズ。	
七月十五日	山田武太郎、言文一致文例第一編ヲ出ス。	
七月三十一日	佐賀日々新聞、言文一致セシムルニ先チ、佐賀縣下ノ方言ヲ訂正セザル ベカラズト説ク。	

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
	七月	山形新聞ノ發起ニテ、公德養成及ビ言文一致會ヲ設ク。	
	八月二日	高田新聞、新潟縣師範學校ニ於ケル前島密ノ言文一致論ニ關スル演說筆記ヲ掲ク。	山形新聞
	八月九日	花叢生、言文一致會ニ模範文ヲ公ニセンコトヲ勸ム。	いばらき
	八月十四日	西村文則、言文一致ノ必要ト、標準語制定及ビ語典刊行ノ急務ヲ説ク。	
	八月二十三日	平野秀吉、『言文一致に就て』ト題シ、標準語辭、語法等ヲ速ニ公ニセンコトヲ促ス。	新潟新聞
	九月一日	今泉露次郎、山田穀城、倉島篤次郎等、新潟市ニ言文一致研究會ヲ設ク。	
	十月一日	言文一致會ニ於テ、言文一致文書方ノ標準ヲ議定ス。	
	十月二日	帝國教育會國字改良部例會ニ於テ、言文一致文書方ノ標準ヲ一定ス。	
	十月十五日	赤峯瀨一郎、齋田耕陽ノ批難ヲ辯ズ。	教育公報二五二
	十月十五日	星一、『國字改良の急務』ト題シ、羅馬字ノ利益ト漢字ノ缺點トヲ列擧ス。	教育時論五九四
	十月二十三日	田村紫巖、社會ノコト便利ノミヲ以テ律スベカラズト説キ、言文一致ノ缺點ヲ指摘シ時文ヲ推奨ス。	和歌山實業新聞
	十月二十六日	福地源一郎、此日ヨリ日出國新聞ニ言文一致説ヲ掲ゲ、文ヲ言ニ近カラシメン前ニ、人ハ先ツ言ヲ文ニ近ツケンコトヲ注意セザルベカラズト述ブ。	
	十月	自由堂ヨリ言文一致普通文つゝり方ヲ發行ス。	
	十月	言文一致會ヨリ言文一致女子普通文ヲ發行ス。	

	十一月一日	江戸川町言文一致會ヨリ新文第一號ヲ發行ス。	
	十一月十日	言文一致會ヨリ全國各商業學校長ヘ宛テ、消息文ヲ言文一致體ニセンコトヲ勸ム。	
	十一月十五日	鴨脚秀克、『言文一致の現在及び將來』ト題シ、言文一致ノ利害、使用文字ノ相互ノ便否、及ビ假名遣ハ歴史的ニ從ヒ、且思想ヲ發表スル形式ハ言文一致體ニテ、其使用文字ハ平假名ヲ用キルベキ理由ヲ論ズ。	教育時論五九七
	十二月	越後直江津ニ言文一致會支部ヲ設ク。	
	十二月	足立栗園、『言文一致私見』ト題シ、言文一致論者及反對論者ノ主張、方今ノ時勢ト思想表出法、言文一致論者ノ注意、及ビ其責任等ニツキテ論ズ。	中央公論十六ノ十一
	十二月一日	言文一致會第三回公開演說會ヲ帝國教育會講堂ニ開キ、三矢重松、大槻文彦、井口在屋、出演ス。又三矢重松ハ、『言文一致ノ前途』、大槻文彦ハ、『言文一致ノ標準語』、井口在屋ハ、『思想運搬機械を大に修繕すべし』ト題シ、言文一致會ニ於テ言文一致ノ必要ヲ説ク。	
	十二月十五日	三矢重松、言文一致文章案ヲ言文一致會取調委員會へ提出ス。	教育公報二五四
明治三十五年	一月三日	高橋五郎、『國字國語改良論者の輕舉妄動附漢字存廢の可否』ト題シテ、急進ハ徒ニ蹉跌ヲ招クニ過ギズト論ズ。	教育界一ノ三
	一月四日	峡中日報、靜所生ノ言文一致論ヲ掲グ。	
	一月五日	山川健次郎ノ、『中學校漢文全廢論』教育時論ニ出ヅ。	教育時論六〇二

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
	一月十九日	福地源一郎、『漢字を減少する議』ト題シ、假名會羅馬字會ノ失敗ハ其常用ニ不便ナルコト、漢字交リ文ヨリモ更ニ甚シキモノアリシガ故ナリ、故ニ先ヅ漢字ヲ二萬乃至三萬ニ限リテ字書ヲ作り、公文書モ之ニ從ヒテ認ムベシト論ズ。	日出國新聞
	二月	國語調査委員會設置ノ豫算、帝國議會ヲ通過ス。	
	二月八日	國語調査委員會委員長前島密、同委員上田萬年外六名ノ囑託ヲ解ク。(文部省)	
	二月九日	日出國新聞、清國問題ヨリシテ漢字廢止ニ反對セル説ヲ駁ス。	
	二月十二日	文部省ニ於テ、文學博士坪井九馬三、理學博士神保小虎、箕作元八、野口保典、磯田良、山崎直方ノ五名ニ、外國地名及人名ノ稱ヘ方書キ方取調委員ヲ命ジ、師範學校、中學校、高等女學校程度ノ地理及歴史教授用外國地名及人名ノ稱ヘ方及ビ書キ方ヲ取調ベシム。	官報
	二月二十二日	言文一致會ヨリ言文一致會ノ會誌ヲ發行ス。	官報
	三月二十四日	國語調査委員會官制發布セラル。	官報
	三月十八日	臺灣總督府民政部總務局學務課ニテ國民讀本參照假名遣法ヲ發行ス。	
	四月十一日	國語調査委員會委員長以下左ノ通り任命セラル。(内閣) 委員長 男爵文學博士加藤弘之 委員 嘉納治五郎 文學博士井上哲次郎 澤柳政太郎 文學博士上田萬年 文學博士三上參次 渡部董之介 文學博士高楠順次郎 文學博士重野安	

四月十一日	釋 德富猪一郎 文學博士木村正辭 文學博士大槻文彦 前島密 委員上田萬年、國語調査委員會主事ヲ命ゼラル。(文部省)	四月十二日官報 同上
四月十四日	文部省内ニ國語調査委員會事務所ヲ設ケ、始メテ會務ヲ取扱フ。	
四月十四日	委員上田萬年、委員大槻文彦ノ兩名國語調査委員會主査委員ヲ命ゼラル。	
四月十六日	林泰輔、保科孝一、岡田正美、新村出、大矢透ノ五名ニ國語調査委員會補助委員ヲ囑託セラル。(國語調査委員會)	
四月三十日	文學博士元良勇次郎、文學博士松本亦太郎、文學博士佐藤誠實ノ三名ニ國語調査委員會臨時委員ヲ命ゼラル。(内閣)	五月一日官報
四月十七日	足立荒人(北嶋)、『教ヘざるに如かず』ト題シ、言文一致會ハ方法ヲ誤レリト叙ベ、言文一致ノ目的ヲ達セントスルニハ、初ヨリ漢字ヲ教ヘザルニ如カズト説キ、漢字保護説ヲ論破ス。	讀賣新聞
四月十九日	報知新聞、言文一致ハ緊切ナル急務ナリト説キ、之ヲ實行セントセバ先ヅ發音ノ教授ヲ嚴密ニ爲スベシト述ブ。	
四月二十日	言文一致協會ヨリ新紀元第一號ヲ發行ス。	
四月二十四日	文部省學校衛生主事室ヲ臨時會場トシ、第一回國語調査委員會ヲ開キ、文部大臣理學博士男爵菊池大麓臨場同會ニ對スル希望ヲ演ブ。	
四月三十日	土陽新聞、言文一致ハ國民ノ膨脹ニ必要ナリト説ク。	
四月	言文一致會ヨリ全國ノ師範學校長ニ宛テ、言文一致實行法研究ノ勸誘狀ヲ發ス。	
五月三日	帝國教育會内言文一致會ヨリ言文一致論集ヲ發行ス。	

年	月 日	事 項	掲載書目
	五月五日	言文一致會ヨリ新文光第一號ヲ發行ス。 言文一致會言文一致體唱歌ノ懸賞募集ヲ爲ス。	
	五月	大島正健、『文字上ノ新同盟』ト題シ、羅馬字專用ニ到ル準備トシテ洋字ヲ制限シテ横書シ、和漢洋三體文字混用體ヲ創ムベシト説ク。	教育界一ノ八號
	六月三日	角嶺、『言文一致に關する卑見』ト題シ、實用ノ文學ヲ支配スル力ハ大ナレドモ、文學ノ實用ヲ支配スル力ハ更ニ大ニシテ持續的ナレバ、文語ヲ捨テテ言文一致ヲ撰ブベキ理ナシト説ク。	鳥取新聞
	六月二十六日	時事新報、其社説ニ於テ中學教育ノ課目ヨリ漢文ヲ除クベシト説ク。	
	六月二十八日	大槻文彦、教育時論社員ノ問ニ應ジテ、『國語改良の話』ヲナシタルモノ、五日發行ノ同誌上ニ掲載セラル。	教育時論六一七
	六月	樋口勘次郎、佛國巴里ヨリ『羅馬字綴を論ず』ト云フ論文ヲ教育時論ニ寄セ、『漢字交リ文先ツ減ビ、假名次ギテ衰へ、羅馬字綴未來ニ發達スベシ』ト冒頭ニ掲ゲテ之ヲ論述セリ。	教育時論六一八
	七月二日	時事新報、國語調査會ニ對シテ語法ヨリモ先ツ字形ヲ改良スベシト告グ。	官報
	七月四日	國語調査委員會ハ、其調査方針ヲ決議公示ス。 一 文字ハ音韻文字ヲ採用スルコトトシ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト 二 文章ハ言文一致體ヲ採用スルコトトシ是ニ關スル調査ヲ爲スコト	

	七月六日	三 國語ノ音韻組織ヲ調査スルコト 四 方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト 又目下ノ急ニ應ゼンガ爲ニ左ノ事項ヲ調査スルコト 一 漢字節減ニ就キテ 二 現行普通文體ノ整理ニ就キテ 三 書簡文其他日常慣用スル特殊ノ文體ニ就キテ 四 國語假名遣ニ就キテ 五 字音假名遣ニ就キテ 六 外國語ノ寫シ方ニ就キテ 一 學究生ト號スル人、文部省制定ノ字音假名遣ハ非自然的非科學的非實用のナリト述ブ。 下平末藏、前記一學究生ノ説ヲ駁ス。 堀江秀雄、國字改良論ヲ發行ス。 保科孝一、『國語調査委員會決議事項について』ト題シ、其報告ニ就キテ一評論ス。	官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞
	七月十四日	岡野久胤、『標準語に就て』ト題シ、口語上ニ於ケル東京大坂ノ二大別ハ永ク繼續スベシト論ズ。	官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞
	七月二十二日	加藤弘之ノ『國語調査に就きて』ノ談ヲ教育時論ニ掲載ス。 三宅亥四郎、『字體の實驗的研究に就て』ト題シ、歐洲ニ於ケル字體ノ實驗的研究ノ例ヲ示シテ、我國字上ニモ此種ノ細心ナル實驗ノ行ハレンコトヲ	官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞
	七月		官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞
	七月二十五日		官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞
	八月十五日		官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞

年	月	日	事	項	掲載書目
	九月	二日	望ムト述ブ。 東京日々新聞、『文字文章改良の一策』ト題シ、學校内ノ文字ヲ制限シ、且ツ其文體ヲ改良セントセバ、先ヅ公文及ビ一般ノ用文ニ對シテ同一工夫ヲ施サザルベカラズト説ク。	教育公報二六二	
	九月	三日	大槻文彦、『假名と羅馬字との優劣論』ト題シ、熟音ノ便ナルコトヲ速記字ノ例ニヨリテ立證シ、普通用ニハ假名ヲ採用スベシト説キ、普通用ト學術用トハ別ナルコト、習慣激變ノ害アルコト、歐米諸國トノ交際上ノ便否等ニツキテ羅馬字ヲ駁ス。	教育界一ノ十二號	
	九月	三日	東海新聞、其社説ニ於テ『國文の改良』ト題シ、今ノ言文一致ハ修辭上ノ缺點多ケレバ文章タル資格ナシ、故ニ國文ノ改良ヲ圖ラントナラバ須ラク材料ヲバ巧妙ナル漢文ニ取り、泰西ノ文理及ビ論理ヲ應用スベシト論ズ。		
	九月	五日	松影生、文章ハ會話ニ非ラザルヲ以テ、言文一致ヲシテ文章ノ資格ヲ有セシメントナラバ、適當ノ修辭ヲ加ヘザルベカラズト説ク。	東海新聞	
	九月	十五日	龜山玄明、『國語調査委員會決議事項を評す』ト題シ、我國ハ東西兩洋文明ノ集合點ナレバ、假名、羅馬字、漢字ノ三種ヲ混用セザルベカラズト説ク。	教育公報二六三	
	九月	二十五日	芳賀矢一、國語調査委員會委員ヲ命ゼラル。(内閣)	官報	
	十月	二日	帝國教育會國字改良部幹事會ハ言文一致委員會ト諮リテ、第四回全國聯合教育會ニ提出スベキ議案ヲ協定ス。		

十月	五日	湖邊生、此日ヨリ言文及ビ音字一致ニ就キ、之ヲ社會ノ公約上、教育者ノ權能上、語法文法修辭上ヨリ觀察シ、口語體表音體ノ實施法及ビ其教科書トノ關係ヲ説ク。	信濃毎日新聞	
十月		桑原隲藏、教育學術界ニ『漢字に就きて』ト題セル一篇ヲ掲ゲ、漢字漢文ノ教授法ヲ改善スルニ當リ、刻下最緊要ノ事業ハ第一漢字ノ字義、及ビ字畫ヲ正シテ學生ノ漢字ニ對スル智識ヲ確實ニスルト、第二ハ漢字ト漢字トノ結合ニ關スル規則ヲ明ニシテ、學生ノ漢文構成ニ關スル智識ヲ正確ニスルトニアリト論ズ。	教育學術界六ノ一	
十月		東京諸新聞、増田乙四郎ガ創作新國字ヲ紹介ス。	官報	
十一月	十五日	外國地名及人名取調復命書發布セラル。		
十一月	十六日	讀賣新聞、『國字改良に就て』ト題シ、國字改良ハ印刷業ニハ別ケテ急務ニシテ、言文一致ノ實行ハ國字改良ニ先ダタザルベカラズト説ク。		
十一月	十六日	讀賣新聞、小森徳之ガ新案ノ自由假名ヲ紹介ス。	日本	
十一月	二十三日	小森徳之ガ、新案ノ自由假名ノ批評日本ニ出ヅ。	同上	
十一月	二十六日	小森徳之、自由假名ノ批評ニ答フ。		
十二月	五日	下野日々新聞、其社説ニ於テ漢文ハ高渾偉大精酷森嚴峻麗生新活潑ナルモノナレバ廢スベカラズト説ク。		
十二月	十六日	義ニ發表シタル外國地名及人名ノ稱ヘ方書キ方ノ増補訂正、及正誤表公ニセラル。	官報	
十二月	十七日	物集高見、『學問の難さ』ト題シ、會話ト記録トハ人稱同ジカラズ、格モ時		

年	月 日	事	項	掲載書目
明治三十六年	十二月十七日	モ語尾ノ趣モ相違ナレバ、言文一致ハ到底不可能ノコトナリト説ク。 日本、其社説ニ於テ其國語ノ基礎ヲナスコト、簡勁ナルコト、國交上必要ナルコト、及ビ言文ニ使用セラル、コト等ヨリ、漢文學ヲ中學教育ヨリ却クルハ不可ナリト論ズ。	讀賣新聞	
	十二月	文部省内ニ開會セル高等教育會議ニ於テ、中學校教科書中漢文ノ目ヲ廢スル建議案ヲ可決ス。		
	一月五日	高橋作術、漢文獎勵論ヲ教育時論ニ掲グ。	教育時論六三八	
	一月七、八日	足立荒人(北鷗)、讀賣紙上ニ於テ國力發展上、及ビ普通教育上ヨリ立論シテ高橋作術氏ノ非漢文廢止論ヲ駁ス。		
	一月十一日	高橋作術、讀賣紙上ニ於テ北鷗所駁ノ齟齬點ヲ指摘シ、漢文ハ英獨佛語等ト同ジク中學程度ニ於テ素養セシムベキモノナリト論ズ。		
	一月 至十四日	飛影ト號スル人、國語調査委員會ノ方針ヲ冷評シ其不可能ヲ説ク。	人民	
	一月十五日	高橋龍雄、教育時論ニ「法學博士高橋作術君ニ呈す」ト題シテ、漢文獎勵論ヲ駁ス。	教育時論六三九	
	一月十八日	足立荒人(北鷗)、高橋作術ノ辯駁ニ對テ、漢文獎勵論ノ如キ流水ニ逆行セル議論ニハ反對セザル可カラズト論ズ。	讀賣新聞	

一月十九日	鍾禮茶ト號スル人、活版及ビ膠寫ノ便ヨリ論ジ、既往ノ保有ヨリモ寧ロ將來ノ進運ニ重キヲ置キ、國字トシテ羅馬字ヲ採用セザル可カラズト説ク。	秋田魁新聞
一月二十一日	萬朝報ハ、其紙上ニ於テ漢文ノ如キハ、一部ノ人ニ委シテ之ヲ普通教育ヨリ除去スベシト説ク。	
一月二十四日	青柳篤恒、支那時文ノ性質ヲ叙シ其研究ノ必要ヲ論ズ。	東京朝日新聞
一月二十五日	時事新報、漢文科ニ時文ヲ加ヘタリトモ實用上ノ効能ニ至リテハ極メテ微微タルモノニシテ、却テ屋上屋ヲ重スルニ過ギザレバ、一日モ早ク漢文ヲ全廢ス可シト説ク。	
三月十日	堀江秀雄、國文學紙上ニ於テ教科書國定ノ事ハ普通文體ニ關スル標準ヲ廣ク公示スルノ好機ナレバ、此時ニ當リテ國文國語ノ諸學者ハ大ニ起タザル可カラズト説ク。	國文學五十二號
三月十一日	田岡佐代治(嶺雲)、西隣ノ大帝國ハ我國力ヲ發展セシム可キ好舞臺ナレバ、其必要上中等教育ニ於テ歐米ノ語學時間ヲ減ズルトモ、寧ロ支那時文ト支那語トヲ課セザル可カラズト説ク。	いばらき
三月十五日	旭東ト號スル人、其弟妹ヨリ得タル實驗ヨリシテ言文一致ノ必要ヲ説ク。	若越新聞
三月	千河岸貫一(櫻所)、漢學漢文ヲ嫌フノ風尙ハ漢學ヲ知ラザルト、歐學崇拜ヨリ起ル雷同トニヨリテ形成セラルト説キ、漢字ノ覺エ難キノ説、及ビ其老衰國ノ學ナルガ故ニ研究スルノ必要ナシトノ説ヲ駁シ、中學教課トシテハ其得處英語等ト異ナルナシト論ズ。	日出國新聞
四月三、四日	中央新聞ハ、ルドウィッヒ、リース(L. Reiss)ガ、獨逸某雜誌ニ於テ、日本	

年	月 日	事 項	掲載書目
六月	六月 十一日	ハ從來耳ヨリモ目ニ重キヲ置キシコト、歐米文明ノ輸入ト共ニ文字ノ便否ニ注意スルニ至リシコト、現今ノ状態ニテハ俄ニ漢文ヲ全廢ス可カラザルコト、然レドモ今ヤ漸ク改良ノ緒ニ就キツ、アルコトヲ述ベ、若シ改良セラレタル曉ニハ、日本人ノ智能の進歩非常ナラント説キタルヲ記載ス。 横濱新報ハ、上田萬年ノ横濱市教育會總集會ニ於テ、日本語ノ性質ヲ説キ、其短所及ビ長所ヲ歴史ノ事實ニ徴シテ指摘シ、支那語トノ接觸ヨリ國語音韻組織ニ及ボセル結果ヲ言海ニヨリテ數ヘ、横濱ノ如キ門戸ノ地ニアル教育家ハ特ニ是等ノ諸點ニ注意セザル可カラザル所以ヲ論ジタル講演摘要ヲ掲グ。	
四月	四月 十日	堀江秀雄、國文學紙上ニ於テ國語調査事業ノ要素ハ制度ヲ完備スルコト、財政ヲ豊ニスルコト、適當ナル委員ヲ任用スルコト等ノ三者ニアリトシ、國語調査會ニ關スル所感及ビ企望ヲ述ブ。	國文學五十三號
五月	五月 八日	文學博士金澤庄三郎、國語調査委員會委員ヲ命ゼラレ、國語調査委員會委員男爵前島密願ニ依テ委員ヲ解カレ、又同委員文學博士芳賀矢一ハ同會主査委員ヲ命ゼラル。	官報
六月	六月 二十三日	日出國新聞ハ、文部省ガ先ヅ漢字ヲ節減シ漸ク全廢セントスル方針ヲ讀シ、各官省モ此舉ヲ贊助シ、公文等ニモ注意ヲ拂ハザル可カラズト説ク。	
六月	六月	松嶺ト號スル人、三十日ヨリ七月二日ニ亘リテ、書讀兩面ヨリ言文一致ノ	

七月	七月 四日	長所ヲ舉ゲ、又一朝言文一致トナラバ文ヨリ言ニ及ボス利益大ナラント述べ、言文一致ハ少クとも普通文トシテ極メテ必要ナリト説ク。	鳥取新報
七月	七月 十三日	時事新報ハ、其社説ニ於テ固有名詞ニ洋字ヲ當ツルヨリ起ル徒勞ヲ例示シ、セザル可カラズト論ズ。	
八月	八月 十九日	明治三十五年四月創立當時ヨリ三十六年七月ニ至ル、國語調査委員會ニ於ケル議案及ビ審議ノ事項並ニ參考資料等ヲ發表ス。	官報
八月	八月 二十五日	讀賣新聞ハ、教育ト方言ト題シ、教科書ニ方言ハナキモ之ヲ解クニ其方言ヲ用ケルヲ以テ、其勢力ハ依然トシテ減スルコトナシ、故ニ先ヅ普通ノ支那文字ヲ以テ書キ得ル言葉ノ外ハ用キザルヤウニ注意セザル可カラズト説ク。	
九月	九月 四日	金子喜一、學者ノ文章ト題シ、漢文くづしノ非組織的ナルヨリ著述ニ及ボス影響、及ビ言文一致ノ組織的ナルコトヲ説キ、古典の文ハ之ヲ中等教育ヨリ排除ス可シト述ブ。	萬朝報
九月	九月 十六日	國語調査委員會ニ於テ、國語調査資料蒐集ノ爲メ、『音韻并ニ口語法取調ニ關スル事項』ヲ印刷シテ之ヲ各府縣ニ配布シ、其調査報告方ヲ依頼シタリ。	官報
十一月	十一月 三十日	高等教育會議議員正木直彦外二名ヨリ、文部省ニ於テ開會セル第九回高等教育會議ニ、『高等小學校ノ國語中ニ於テ、「ローマ」字ヲ教授スルコトヲ得ルノ途ヲ開カレンコトヲ望ム』トイフ建議案ヲ提出シタルモ否決セララル。	
十二月	十二月 五日	鈴木大拙、東洋哲學ニ於テ漢字廢止論者ニシテ、往々譯語ニ支那雜語新熟	

年	月	日	事	項	掲載書目
	十二月	二十六日 二十七日 二十八日	<p>字ヲ借用又ハ創製スルヲ難ズ。 外國地名及人名ノ稱ヘ方、書キ方ニ關スル報告ノ増補訂正出ツ。 石川辰之助、加藤博士ニ質スト題シ、國語調査委員會ノ文部省規定假名遣ニ對スル優柔ヲ責メ、長音符ニ關スル所見ヲ述ブ。</p>		<p>東洋哲學十ノ十二 官報 讀賣新聞</p>

國字國語改良論說年表畢

明治三十七年三月卅一日印 刷
 明治三十七年四月一日發 行
 明治三十七年七月廿二日翻刻印刷
 明治三十七年七月廿七日翻刻發行

定價金貳拾錢

文部省內

國語調査委員會

日本書籍株式會社

代表者 大橋新太郎

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

石川金太郎

東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

株式會社 秀英舍

東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

發行者

日本書籍株式會社



編纂者 兼 發行所
 翻刻者 兼 發行所
 印刷者 兼 發行所

3



發行所 日本書院發行所

編輯委員會

昭和二十一年

Vertical text on the left side of the right page, possibly bleed-through or faint print.



